NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第19号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会
企画委員会《 広報宣伝部 》
発行日：2023 年 6 月 第 19 号

担当窓口：望之門保育園 佐伯（さえき） 剛（たけし）
TEL 6651－7741
Fax 6652－8841

大地協の最新☆情報は右記 ➔
QR コードをご覧ください。

大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど
上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

繋がっていく喜び

＝ 保育士として働き始めたころを思い出して ＝

この数年、新型コロナウイルス感染症の影響もあって、子どもたちを取り巻く環境や社会が大きく変わり、私たち保育士たちも悩み、考える毎日でした。様々なことが制限される中ではありましたが子どもたちが変わらぬ笑顔でいてくれたこと、その笑顔に、その存在にパワーをもらい、救われたように思います。子どもたちの「生きる力」の強さ、存在そのものが「希望の光」だと改めて感じました。

保育士として働き始めたころ、子どもたちはとてもかわいいのだけど、何をどうしていいのか分からないことばかりで、失敗もするしと、落ち込んで悩んでいると、「保育は一人でするんじゃないよ。みんなで助け合って考えていくんだよ。」と、声をかけてくださった先輩がいました。その言葉に、張りつめていた気持ちが、すっと解けたのを覚えています。子どもたちの話をしていると、気が付けばいつも笑っています。本当に、保育が好きだなと感じる瞬間です。

私たちの担う仕事は、その時々の子どもたちの対応に、臨機応変に、また柔軟に対応できることが、最も必要だと思います。子どもたちは自ら学び、興味、関心、探求心を日々の遊びの中で体験し、膨らませていきます。そして、友達との関りの中で葛藤し、喜びを分かち合い、心を育んでいきます。その過程はみんな違い、だから面白いし、大切に支えていきたいと思うのです。

子どもたちが、自分に自信を持ち、自分が大好きと大切に思ってくれたら、私たち保育士にとって、さらなる喜びへと繋がっていくように思います。これからも保育士の仲間と共に子どもたちのことを語り合い、笑い、悩み、喜び合いながら、一緒に保育を考えていきたいと思います。

愛信保育園　高 典子

保育士で良かった
嬉しかったEpisode!

本気(マジ)であそぶことの楽しさ

保育士として働いて４年。年々「保育士」、というより「あそび上手士」になっている気がする。保育士として日々子どもと関わる中で一番大切なこと、それはあそびだと日々実感する。基本的生活習慣の確立に向けての介助・安心安全な環境作り・子どもの発達に応じた保育設定、どれも大切。だけど、それらは目の前の子どもなしでは考えられない。保育園で生活している子どもたちを見ていて分かったことは、子どもはあそびの中でそれらを“自ら”学んでいくということ。子どもがあそびに夢中になっているとき、時間も忘れて集中して何かに取り組んでいる時、子どもたちの目は驚くほど輝いている。邪魔できない。声もかけていいのかわからないことさえある。子どもとあそぶって、本気で楽しまないと子どもの世界には入れない。自分自身が本気であそびこんでいるときに子どもたちも興味を持ってくれる。水や泥などの感触あそびも、おにごっこ、ドッヂボールなどのルールあそびも、リトミックや運動あそび、ごっこあそびなんかも全力で楽しんでみる。大人になってからしなくなったことも実際に思いきりやってみると楽しい。服が汚れるとか後片付けが大変だ、とかは後回しで思いきりやってみることで子どもたちもノッてくる。本気であそんでいるからこそ、関わりにも本気になれる。

“教育”とか“指導”する、なんてことも時には大切、かもしれないけれど子どもの気持ちを聴きながらもこちらの気持ちも正直に伝えることの方が子どもたちとの関係はグッと深まると思う。子どもたちと本気で向き合って信頼関係ができてくると、保護者の方とも自然と繋がることができる。「うちの子、池田先生のこと大好きやから、信頼してる」と保護者の方に言われたことがある。とても嬉しかったし、保育士として働いていてよかったなと感じた。

新人職員の方へ。子どもたちから日々多くのことを学ぶ毎日。保育では職員間の関係性や連携も大切。その他事務的な業務や保育の準備にも追われて余裕なんてない。だよね、どれも大切だし。どうか目の前の子どもたちとあそんでいるときはその瞬間を思いきり楽しんで！独りじゃない、仲間はたくさんいるよ。

社会福祉法人石井記念愛染園隣保事業
大国保育園　池田 税

共に学ぶ私たちの場所 ★地域の子育て支援研究会★

地域の子育て支援研究会では、日々の保育現場での悩みや困りを“自分ごと・施設ごと”として抱え込まず、共有することで同じような悩みを持つスタッフがいることに気付いたり、違った保育方法を聞くことで視野の広がりを目指し活動しています。

2022 年度は「“違っていい”と感じる心が育つために」という学習テーマで、子どもたちが「自分とは違う人（考え）」と出会ったときに、その違いをあたりまえに捉え尊重するか、異質に感じてしまい受け入れられないかでは、それからのその子の生活の豊かさは大きく変わるだろうと考え、人との違いを“違って良いんだよ”と伝える為の取り組みを、情報交換を通して学び合ってきました。

さらに日常の保育に長期継続的に違いを子どもたちに伝えるため工夫されている聖和保育園の取り組みを森本宮仁子事務局長、長瀬光子園長に施設見学と共にインタビュー学習を実施させて頂きました。インタビューでは現在の生野区・聖和保育園の状況や、本名を大切にしてほしいという願い・そこにある差別について、偏見の克服と前偏見とはどういったものなのかなど多岐にわたって話して頂き、実際のエピソードやスタッフの悩みを交えて質疑応答をして頂きました。“文化の違い”に着目し始めた学習ですが、『「文化を共生（共有）したいのではなく人を共有したい」文化はそのためのツールであり「あなたがあなたでいい」と伝えたい』という森本先生の言葉が、子どもたちに伝わってほしい願いの根幹のような気がします。

地域の子育て支援研究会では スタッフの悩みや偏見、「これってどう思いますか？」を施設を越えて雑談も交えながら対話しています。和やかな雰囲気の中で様々な意見を交わし、改めて“同じような悩みを持っている人がいて、その人も自分の場所で頑張っているんだろうな”“上下関係ではない、気軽に相談できる人がいる”ことの心強さを実感できます。安心して思いを発言し、共感の中で学び合うことができる居場所、一度参加してみませんか？

地域の子育て支援研究会
望之門学童クラブ　大西　奈々子

行事の再開をみんなで迎えて

登山、みんながんばったね！

「とざん、またいこうな！」。　5月11日に初めて登山を経験した4歳児のこどもたちから聞こえてきた言葉です。北田辺保育園では、4歳児と5歳児が春と秋に登山に出かけます（5歳児は卒園前に金剛山に登ります）。5月のこの時期には、二上山（奈良県）に登ります。

新型コロナウイルス感染症が確認され始めた2020年2月頃から、様々な行事が内容変更・延期・中止となりました。二上山登山も緊急事態宣言、まん延防止等重点措置や天候等もあり、晴れて4歳児と5歳児が登山下山ともにできたのは今回約3年ぶりでした。登山道は、途中ゴツゴツとした岩場や急な坂道もあります。4歳児のこどもたちが途中で立ち止まったり泣いてしまう場合もあり、登頂するまでにはかなりの時間を要することも想定していました。けれど当日は、「つかれた～」「あしいたい～」と言って立ち止まる姿はありましたが、ともだちや5歳児のこどもたち、保育者に励まされながら歩き続け、ほぼ予定通りの時間に無事登頂することができました。あらためてこどもたちの秘めたる力と、ともだちとのつながりを実感しました。　登山翌日、あるお母さんがエピソードを話してくれました。お母さんが「登山、よくがんばったね」とこどもに声をかけたところ、『おかあさんもおべんとうがんばったね。おいしかったよー！』と、ハグをしてくれたとのこと。お母さんも嬉しそうに話してくださり、そのエピソードを聞いた保育者がまわりの職員にも話してくれ、みんなでほっこりした気持ちになりました。　1年の中で節目、節目におこなわれる行事の大切さをあらためて感じています。コロナ禍にみんなで知恵を出し合い様々な工夫した経験もいかしながら、これからの保育と行事をみんなでつくっていきたいと思っています。

社会福祉法人 創の会 北田辺保育園
松岡 房江

福祉系書籍紹介ブリビオバトル

「置かれた場所で咲きなさい」

著者　渡辺　和子
（ノートルダム清心学園理事長）

有名なフレーズなのでご存じの方も多いとは思いますが、お薦めの一冊となります。十数年前に一度渡辺先生の講演会を聞く機会があり、今でも印象深く心に残っています。渡辺先生の紹介をしますと、キリスト教カトリックの修道女であり、３６才でノートルダム清心学園の学長に抜擢されています。苦悩が絶えず５０才でうつ病になり自殺も考えていました。数々の苦しみの中で、ある神父から送られた言葉が「置かれた場所で咲きなさい」でした。自分の置かれた「環境」に憂うのではなく、どうすれば与えられた場所で自分らしく「咲く」ことができるだろうかと考えるようになったと記されています。

私自身も園長という役割を与えられ、自分なんかで良いのかと考えることもありますが、この言葉を励みに自分にできることを自分なりに一生懸命頑張ろうと考えるようになりました。

この本はキリスト教のエッセンスが多々出てきますが、キリスト教と関係のない方も生き方の道しるべとして勇気付けられる一冊です。大地協のセツルメント精神とも渡辺先生の教えは通じるものが多いと感じています。本の最後には「大切なのは人のために進んで何かをすること。」と記されています。「人に迷惑を掛けない。」から一歩進んで「手を差し伸べる」ことが求められています。私たち社会福祉の現場でも、決められた業務に追われる日々ですが、そこから一歩抜け出して「手を差し伸べる」ことができたら、それは成長した証しとなり、自分らしく咲くことができるのではないでしょうか？それぞれ置かれた場所で最大限輝けるよう共に頑張りましょう！

社会福祉法人イエス団天使保育園
四貫島友隣館　嶋田 良介

地域の中にヒントが…

＝ 新たな出会いを迎えて ＝

私は西淀川区障がい者基幹相談支援センター「風の輪」で相談員として働いています。障がい児・者施設に 11 年勤務した後、相談員として働いて３年目になります。
障がいのある方や保護者の方、地域の方等から生活上の様々な困りごとに関する相談を受け、地域で安心して暮らせるよう調整をしたり、研修やイベント開催等を通じて事業所間の連携を図るのが主な仕事です。
施設の勤務では、施設以外での利用者の様子を伺う機会が少なかったのですが、相談員として相談者の方々と接していく中で、改めて一人一人が地域の中で暮らしている事を実感しています。

利用者の方のお話を聞き、その方に必要なサービス（ヘルパー派遣等）を紹介することもありますが、それでその方の暮らしの問題が解決するかといえば、そうではありませんでした。家族やヘルパーの他にも、隣人や散髪屋、スーパーやコンビニ等、人それぞれに地域との結びつきがあり、関係が上手くいってなかったり、逆に頼りになる存在だったりします。生活全体を考え、それらの媒介役になることでご本人が生活しやすい様にしていく事が大切だと感じています。

一方、事業所間の連携についての仕事の一例として、区内保育所や幼稚園、小学校、支援学校や児童発達支援センター、放課後等デイサービス、区役所等、こどもを支援している機関の集まりであるこども部会の事務局を担い、就学時の引き継ぎに関する情報共有の検討や、様々な研修会を行っています。昨年度は発達が気になるこどもの支援について、出生時から乳幼児健診、就学とそれぞれのライフステージにおける記録を一冊にまとめ、保護者が毎回支援してくれる人に一から説明しなくて済む様、区独自の「サポートファイル」を作成しました。

日々思うことは相談したり、助言を受ける先輩とのコミュニケーションはとても大事だということです。皆さまも臆せず相談してほしいと思います。担当される園児さんや保護者とのやりとり、行事の準備、戸惑いながらも忙しい毎日と思います。ただ先輩方も同じ道を通ってこられています。その経験を教わったり相談をしながら、身に付けていって下さい。

良い支援や関係作りには、ご本人を知ろうとすることが必要で、園での様子だけではなく、自宅内や休日、隣人付き合いはどんな様子なのだろう？それを知ることも、支援の一助になるかも知れません。他者を知ることは自分の価値観や人生経験の幅が広がるきっかけでもありますので、自分の人生も豊かに成り得るのではと思います。

社会福祉法人　水仙福祉会
西淀川区障がい者基幹相談支援センター 風の輪
日紫喜 淳